

〔寂昭法師・名ノリ〕 是は大江の定元出家し、寂昭法師にて候、我入唐渡天の望み候ひて、只今思ひ立ち、是は早石橋にて候

向ひは文殊の浄土、清涼山にて候程に、此の辺に休らひ、橋を渡らばやと思ひ候

松風に花を薪に吹きそひて、雪をも運ぶ山路かな

〔樵〕 樵歌牧笛の声、人間万事さまざまに、世をわたり行く業ながら、あまりに山を遠く来て、雲又跡を立ちへだて、入りつる方も白浪の、谷の川音雨とのみ、聞こえて松の風もなし

実に誤つて半日の客たりしも、今身の上知られつつ、妻木背負ふて斧かたげ、岩根はげしき岨伝ひ、小笹を分けて歩み来る

〔法師〕 いかにか夫れなる山人、是は石橋にて候か

〔樵〕 さん候、是は石橋にて候よ、向ひは文殊の浄土にて、清涼山とぞ申すなり、よくよく御拜み候へ

〔法師〕 我が身の上を仏慮にまかせ、橋を渡らばやと思ひ候

〔樵〕 暫く候、其かみより、名を得給ひし高僧貴僧と聞えし人も、爰にて月日を送り給ひ、難行苦行捨身の行にてこそ橋をも渡り候ひしが

獅子は小虫を喰はんとて、まづ勢をなすところ聞け、我が放力のあればとて、容易く思ひ渡らんこと、アラ危しの御事や

〔法師〕 謂れを聞けばありがたや、猶々この橋の謂れ、精しく御物語り候へや

〔樵〕 語つて聞かせ申すべし

夫れ天地開闢の以来

雨露を下して国土をわたる、是即ち天の浮橋とも云へり、其の外国土世界に於て、橋の名所様々にして、水波の難を逃れては万民富めり、世を渡るも即ち橋の徳とかや

然るに此の石橋は巖峨々たる岩石に、おのれと掛る橋なれば、石橋とこそ名付けたれ

実に此の橋の有様は、其の面わづかにして、尺よりは狭う渡せる長さ三丈余り、苔は滑りて足もたまらず、谷のそくばく深きこと数千丈とも覺えたり

遙かに峰を見上ぐれば、雲より落つる荒瀧に霧朦朧と闇うして、下なる音も白波の、音は嵐に響きあひて、虚空を渡る如くなり

橋の景色を見渡せば、雲に聳ゆる粧ひは、譬へば夕陽の雨ののち、虹を放せる其の形、又弓を引ける如くにて、神変仏力にあらずしては、進んで人や渡るべき

向ひは文殊の浄土にて常に清香の花降りて、簫笛琴箏篠夕日の雲に聞ゆべき、目前の奇特あらたなり暫く待たせ給へや、影向の時節も今幾程によも過ぎじ

〔獅子〕 獅子団乱旋の舞樂のみぎん、獅子団乱旋の舞樂のみぎん、牡丹の英匂ひみちみち、大巾利巾の獅子頭

うてやはやせや牡丹芳牡丹芳、黄金の蕊あらはれて花に戯れ枝に臥し転び、実に上なき獅子王の勢ひ、靡かぬ草木もなき時なれや、万歳千秋と舞納め、万歳千秋と舞納め、獅子の座にこそなほりけれ